

第3部 高槻市民の家族関係

第11章 婚姻状態と健康状態

濱本希美

1 はじめに

今までも婚姻状態と健康状態について多く関心が持たれてきた。これはこれからの日本の課題とされている問題の一つである。未婚者の増加によって社会に与える影響だけではなく、生涯未婚が増えると未婚者を誰がどう支えるのかという課題も多い(無縁社会2010)。未婚者を支えるという発想になるのは、一人では生活していくことができず、健康状態を永遠に保つのは不可能に近いと考えるからである。そこで健康と結婚というのは大きな関わりがあると考え。近年、婚姻状態の傾向として、結婚する人口が減少してきているというのは認識している人が多い。しかし、その減少というのも、どのようにどれくらい減少しているかまでは認識されていないのである。それが明確にわかるのが以下のグラフである。

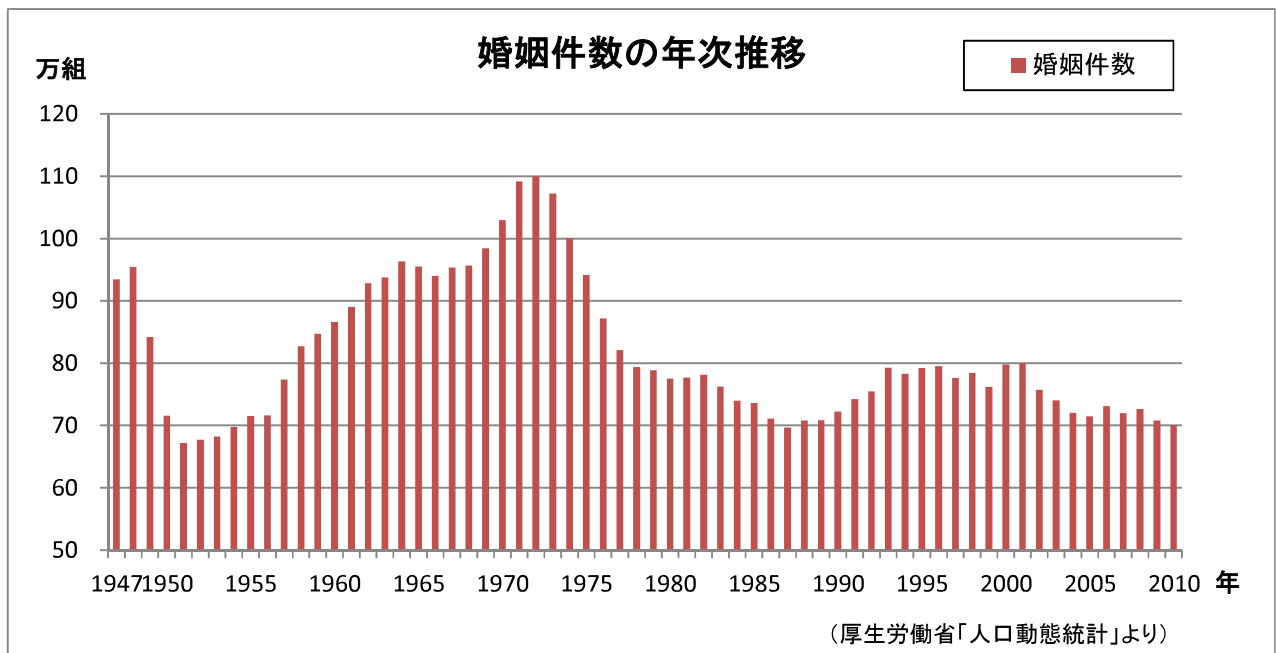


図1 婚姻件数の年次推移

このグラフの中でも近年では2000年から減少しているのが目立っている。多少の増減はあるものの減少傾向があるのは確かと読み取ることができる。暮らしていく上で結婚する

ことは、人が人をつながりを持つ一つのきっかけとなると考えられる。結婚することにより、新しい家族が生まれる可能性ができ、また次の人へとつながりが続いていくのである。家族というのはお互いが支え合い、新しい関係が生まれることである。これらのことから、婚姻状態と健康状態の関係性を調べるのは大きな意味がある。

2 仮説

今回以下の2つのことについて分析しようと考え仮説を立てた。

①婚姻状態と健康状態が関係あるのではないか。

②また、それは男女によっても差が出るのではないか。

この2つのことと並行して、健康状態とは日々の生活のどの部分が密接に関係しているのか、ということも分析した。また、男性は女性と比べ、親しい人が少ない傾向にあり、男性の44.6%が親しく付き合っている近所の人「いない」と答えた。(朝日新聞デジタル)¹これより、男女の差というのは今回の調査にも大きく関連があると考え、仮説にも立てた。

3 データ、変数の説明

3.1 データについて

2011年に行われた「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」のデータを使用した。高槻市に居住する20歳以上の男女を調査対象とし、対象者の数つまり、計画サンプル数は2000人であり、回収の結果、有効回収数は1225人、有効回収率は61.3%（暫定）であった。

3.2 変数について

今回、「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」から用いた質問項目は、大きく次の5つである。Q51のあなたの現在の健康状態はいかがですか。との問いに対し、1. 悪い～5. 良い、で測定した。Q52の最近、ストレスを感じますか。の問いに対しては、1. よく感じる～5. まったく感じないで5つで測定した。Q53のあなたの睡眠時間は1日平均どれぐらいですか。の間に対しては、「1. 9時間以上」、「2. 6～8時間」、「3. 4～6時間」、「4. 4時間未満」と4つで測定した。Q54.A.B.Cあなたはどの程度食事をとっていますか。朝

表1 婚姻状態(度数分布表)

		N	構成比
有効	既婚(配偶者あり)	447	64.0%
	既婚(離別・死別)	110	15.8%
	未婚	117	16.8%
	合計	674	96.6%
欠損値	99	24	3.4%
合計		698	100.0%

食・昼食・夕食に対しては、共通で「1. 毎日」、「2. 週に 5~6 回」、「3. 週に 3~4 回」、「4. 週に 1~2 回」、「5. ほとんどない」の 5 つで測定した。Q59.A あなたは、現在、結婚なさっていますか。の間に対しては、「1. 既婚(配偶者あり)」、「2. 既婚(離別・死別)」、「3. 未婚」、の 3 つで測定した。また、Q52、Q53、Q54.A.B.C については回答を反転させて分析を行っている。

表 2 婚姻状態以外の変数(記述統計)

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
Q51 健康状態	655	3.525	1.083	1	5
Q52 ストレスを感じるか	684	3.563	1.030	1	5
Q53 睡眠時間	686	2.518	0.584	1	4
Q54 食事(朝食)	689	4.685	0.891	1	5
Q54 食事(昼食)	688	4.852	0.554	1	5
Q54 食事(夕食)	687	4.933	0.343	1	5
有効なケースの数(リストごと)	649				

4 分析

今回、婚姻状態と健康状態を分析するのに分散分析を用いた。また、健康状態とその他の関連のありそうな項目は、相関分析を用いて分析した。その結果以下のようになった。

表 3 婚姻状態と健康状態(全体)

		平均値	度数	標準偏差	F 値	有意確率
結婚状態	既婚(配偶者あり)	3.515	802	1.075	4.816	0.008
	既婚(離別・死別)	3.301	133	1.052		
	未婚	3.672	207	1.096		

表 4 婚姻状態と健康状態(男性)

		平均値	度数	標準偏差	F 値	有意確率
婚姻状態	既婚(配偶者あり)	3.470	366	1.097	4.39	0.013
	既婚(離別・死別)	3.177	34	0.869		
	未婚	3.761	92	1.052		

表 5 婚姻状態と健康状態(女性)

		平均値	度数	標準偏差	F 値	有意確率
婚姻状態	既婚(配偶者あり)	3.552	433	1.057	1.713	0.181
	既婚(離別・死別)	3.343	99	1.108		
	未婚	3.586	111	1.132		

Q52	ストレスを感じるか	相関係数は $-.334^{**}$ であり、1%水準で有意であった。
Q53	睡眠時間	相関係数は $.109^{**}$ であり、1%水準で有意であった。
Q54	食事(朝食)	相関係数は $.100^*$ であり、1%水準で有意であった。
Q54	食事(昼食)	相関係数は $-.129^{**}$ であり、1%水準で有意であった。
Q54	食事(夕食)	相関係数は 0.067 であり、有意でなかった。

検定の結果、分散分析で行った健康状態と婚姻状態については全体的に有意という結果が出た。男女を分けてみると、男性では有意、女性では有意ではない、関連がないという結果になった。次に相関分析で行った健康状態と他の項目の関連性については食事の夕食以外は関連があるという結果が出た。

婚姻状態と健康状態が関連については実際に関連があり、特に男性に強く関連があると読み取ることができる。この表3~5の中でも平均値のところをみると男女の違いがはっきりと分かる。男性は既婚(配偶者あり)、未婚に比べ既婚(離別・死別)の平均値が低い。これは女性にも言えることだが、男性の方が大きく他の数値と差が出ているのが目立っている。これは、男性の方が配偶者の離別・死別が健康状態に影響しているといえる。男性にとって配偶者の存在が大きく関係し、生活を左右する要因の一つであるといえる。それに比べ女性の結果からは多少の差があるものの、配偶者によって男性ほど大きく左右されることはなく、女性の強さの部分が出ている。

健康状態とその他関連のありそうな項目については、関連の強いものから見ていくとストレスを感じるかどうか、昼食、睡眠、朝食、の順になった。夕食については関連がないという結果であった。健康状態というのは決してこの項目だけではないが、さまざまなことと関連していると読み取ることができる。意外なことに食事の中では昼食が一番関連深く、注目されにくい部分である。三食食べることは大切とされ、朝食は絶対に食べたほうが良いことや、夕食は何時以降食べない方が良く、先にこれを摂取すると良いなどさまざまとりあげられているのに対し、あまり昼食のことは聞かないからである。健康状態というのは私たちの気付かない、気付きにくいところでも大きく影響している。

今回私が仮説として立てた①婚姻状態と健康状態が関係あるのではないかと。に関しては支持されたといえる。②また、それは男女によっても違うのではないかと。という仮説に対しても、男性、女性で分析結果に違いが出たため、支持されたといえる。健康状態とは日々の生活の意識していないところにも大きく関係しているといえる。

5 結果のまとめ

今回の分析結果を受けて、健康状態と婚姻状態は生活していく上で大きく関連していることが分かった。また、それは全体の結果を見ただけで判断することもできるが、男女別で見るとさらに数字として結果が出て、わかりやすかった。日本の男性と女性の強みや弱みの部分も大きく反映されていた。男性にとって婚姻状態とは、結婚しているかどうかというよりは、配偶者の存在の有無が大きく影響しているといえる。生活していくのに

は頼り頼られる、支え支えられる人がいることが直接健康状態につながるのである。今回は女性では支持されず、健康と関連がなかった。女性には近所付き合いや趣味などの男性に比べて違う部分での人とのつながりがあるからだと考える。また、健康状態と食事は関連が強いものが多く、中でも朝食より昼食の方が影響しているという意外な結果が出た。このことから、まだまだ健康状態に関係する要因は気付かないところにたくさんあると考える。人として健康状態というのは婚姻状態と大きく関連を持ち、特に男性で影響する。また、その健康状態についても、今回あげた項目のほとんどが関連あり、という結果で、日々の生活そのものが健康状態の一つの要因となっているといえる。

文献

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編, 2010, 「無縁社会——”無縁死”三万二千人の衝撃」
文芸春秋.

厚生労働省 HP(<http://www.mhlw.go.jp/>)

内閣府 共生社会政策統括官 HP

(http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/b1_s2-1-2.html)

朝日新聞デジタル(<http://www.asahi.com/>)

第12章 ネット環境における家族との関係について

福井紫穂

1 はじめに

世界でそして、日本ではもうインターネットという存在は日常の一部である。そして、それは一つのコミュニケーションツールとして成り立っている。情報通信白書でも平成 21 年末のインターネット利用者数は、平成 20 年末より 317 万人増加して 9,408 万人（対前年比 3.5%増）、人口普及率は 78.0%（前年から 2.7 ポイント増）となったと述べられている。また、個人がインターネットを利用する際に使用する端末については、モバイル端末での利用者が平成 20 年末より 504 万人増加して 8,010 万人（対前年比 6.7%増）、パソコンからの利用者は、259 万人増加して 8,514 万人（対前年比 3.1%増）となったとも述べられている。

ここからも携帯電話というツールは特になくはない存在であるとわかる。一見、便利なツールであるが、弊害も多いように思う。携帯依存症というのは若い人によく見られる傾向だ。確かに他人とコミュニケーションをとることは今までよりも格段に増加したが、家族との関係はこのツールによってどのように良くなったであろう。もしくはどのような悪影響を及ぼしたであろう。

家族間での会話はやはりとても重要であるということが言えるであろう。平成 19 年版国民生活白書の第一章にも「家族とのつながりがある人ほど精神的安らぎを得られる」と書かれている。そしてその中の図では、家族との会話が深いほど、精神的安らぎを感じている割合が大きいと読み取ることができる。

そこで、私はインターネットが及ぼす家族との会話の関係について実際に考察していきたいと思う。

2 仮説

私はネット環境（携帯電話の利用率増加、インターネット利用者の増加等）の充実が個人の時間を増加させることにより、家族との時間に影響を与えたことにより会話を減少させたと考える。カーネギーメロン大学のクラウトらによって考えられたインターネットパラドクスという説では、インターネットの利用によりインターネット上で知り合う新しい人間関係を増加させる一方で、インターネットの利用に時間を取られることから、身近な家族や友人等とのコミュニケーションが減少してしまい、対人関係や心理的健康が阻害されると述べられている。ただし、この調査はインターネットの普及があまり進んでいない時期のものであったため、インターネットによるコミュニケーションの相手が既存の人間関係ではないという点に注意をする必要がある。

- ・ネット環境が充実したことにより家族との会話の時間が減少した（仮説）
- ・ネット環境が充実したことにより家族との会話の時間が増加した（対立仮説）

3 データ・変数の説明

3.1 データについて

2011年に「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」を行いました。調査対象（母集団）は高槻市に居住する20歳以上の男女であり、対象者の数（計画サンプル数）2000人、有効回収数1225人でした。よって、有効回収率は61.3%なった。

3.2 変数について

図2の携帯電話上での電子メールの選択肢の各々の回答は以下である。

- 1→ほとんどない,全くない、
- 2→月に1~2日
- 3→週に1~2日
- 4→週に3~4日
- 5→ほぼ毎日

また、携帯電話上の電子メールと家族との会話時間は、一日あたりの平均時間を回答してもらったものである。

4 分析

表1は、家族との平均会話時間と年齢のクロス表である。現在の傾向から単純に、平均会話時間と年齢の関係を推測してみる。年齢が高くなるにつれて、平均時間が高くなるというのではないであろうか。しかしながら、この図からは平均会話時間と年齢には関係があまりないのではないのかと考えられる。例を挙げて考えてみる。大幅に会話時間が違うであろう、60代と20代の30分と60分を抜き出してみる。まず、30分を人数の割合と比較して考える。20代が26人であるので、比で考えると60代は約65人になる。そして、実際の数46人。大幅に20代より少ないのである。次に60分を挙げてみる。同じように比で考えた60代の推定人数は約63人。しかしながら、実際数は72人。やや多いがそれほど多いともとれないであろう。他の年代を挙げてみても、各々違う。よって、年齢が高いからといって家族との会話が多いというわけではないであろう。

※表 1

家族との平均会話時間と年齢 のクロス表								
度数	家族との平均会話時間	年齢						合計
		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	
0	3	12	7	11	8	19	60	
1	1	0	1	2	3	0	7	
2	0	1	1	0	2	1	5	
3	1	1	0	0	0	0	2	
4	0	0	0	0	1	0	1	
5	1	3	5	1	6	5	21	
6	0	0	0	0	0	1	1	
7	0	0	1	0	0	1	2	
8	0	0	1	0	0	0	1	
10	10	8	15	21	19	15	88	
12	0	0	1	0	0	0	1	
14	0	0	0	0	1	0	1	
15	1	3	5	3	5	5	22	
20	4	7	10	6	10	4	41	
30	26	22	26	36	46	44	200	
40	1	3	7	3	7	0	21	
45	1	2	0	0	0	0	3	
50	1	0	5	1	3	7	17	
60	25	53	53	38	72	54	295	
70	1	0	0	0	1	0	2	
80	0	1	2	0	2	1	6	
90	2	3	3	4	18	6	36	
100	3	3	1	1	4	5	17	
120	13	28	21	23	30	27	142	
130	0	0	0	0	1	0	1	
150	1	0	1	0	2	1	5	
170	0	0	0	0	0	1	1	
180	6	9	8	8	14	9	54	
200	1	1	0	0	0	1	3	
240	3	3	3	0	4	2	15	
300	1	11	7	2	8	5	34	
合計		106	174	184	160	267	214	1105

表 2 は、携帯電話の電子メールの利用頻度と年齢のクロス表である。利用頻度の見方は上記で示した通りである。一般的に考えてみれば、携帯電話の利用頻度は若い人の方が多いであろう。この表からも、利用頻度 5 が 20 代から 50 代の 8 割を占めるといっても過言ではないであろうか。これには携帯の普及率と年齢も関係していると考えられるがここでは関係はわかりかねるのでおいておくことにする。

※表 2

		携帯電話の利用頻度と年齢のクロス表						
		Q65 年齢						
		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	合計
利用頻度	1	2	3	3	3	7	14	32
	2	0	4	9	3	13	3	32
	4	14	24	28	22	26	12	126
	5	83	119	104	80	46	7	439
合計		99	150	144	108	92	36	629

表 3 は様々なインターネット環境やテレビの視聴時間と家族との平均時間の相関関係を表したものである。

ここで、家族との平均時間と相関関係が見られたのは、パソコン上での電子メールと 1 日あたりのテレビの平均時間である。つまり、この二つと正の相関関係が見られると見え

※表 3

	相関係数	家族との平均会話時間
家族との平均会話時間	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	1 1112
パソコン上での電子メール	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	0.092* 0.013 729
携帯電話上での電子メール	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-0.059 0.109 736
情報の検索	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-0.002 0.967 747
インターネットショッピング	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	-0.056 0.125 748
電子掲示板へのアクセス	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	0.049 0.182 740
ミクシィやフェイスブックなどのソーシャルネットワークサービス	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	0.027 0.462 738
1日あたりのテレビの平均視聴時間	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	0.122** 0 1104
ユーチューブなどの動画共有サービスへのアクセス	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	0.014 0.7 732
*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。		
**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。		

る。(会話時間は構成を後から逆にした) よってここから読み取れることは、パソコン上での電子メールが増えると家族との平均会話時間が減り、テレビの視聴率が増えると家族との平均会話時間が減るということである。インターネット情での行動は、ほぼ会話時間減少とつながらないことになる。よって、ここで私の仮説は棄却された。

5 結果

結果として、インターネットツールの普及は家族との会話の減少させているわけではないということが分かった。その一方、パソコン上のメールやテレビの視聴度合いが家族との会話を減少させていることが分かった。では、どうしてこのような結果になったのだろうか。

一つ目のパソコン上のメールであるが、パソコン上のメールというものは、重要度の高い文章を扱うことが多いのではないだろうか。ビジネスにも多く使われるであろう。つまり、個人でパソコンに向かって作業をすることにつながる。ビジネス中のメールと考えると、仕事である。仕事が長引けば長引くほど、家族との時間はとれなくなる。よって、会話の減少とつながると考えられる。次に、パソコン上のメールは携帯電話より簡単に送受信ができないと考えられる。携帯電話でのメールは会話をしながらでも打つことは可能であり、悪く言えば食事中でも返信可能である。だが、mixiなどのソーシャルネットワークの依存は会話と直接影響を与えるのではないのかとも思う。しかし、残念ながら、関連性は見られない。これはなぜであろう。これも手軽さであろう。ソーシャルネットワークはパソコン上でも、携帯電話でも操作可能であり、それほど時間をとるものではない。会話をしながらでもアクセスしたり、投稿することは可能である。

上述では、コミュニケーションツールとしてのネット環境について扱ったが、一方でテレビはどうであろう。テレビはインターネットとは全く違うツールである。しかしながら、上述以外のツールに一貫しているのは娯楽が関係しているということである。上述では、ツールの手軽さがポイントかと思われるが、こちらはどれも手軽に利用することができる。では、何が違うのであろうか。やはり、パソコンはテレビよりも普及率には劣る。また、お年寄りも簡単に操作可能である。そして、情報検索や動画共有サイトは個人が暇な瞬間など、時間に左右されない。一方テレビは録画をしなければ時間に左右される。そして、家族という瞬間、つまり食事時間なども見ることが可能であり、逆に会話を妨げる要素になりかねない。

総合してみると、ネット環境は私たちの時間を左右せずに、生活の中に組み込まれているのではないかと思う。実際、高齢者には使いにくい機器ではないとはいえないが、最近では高齢者向けの携帯電話や気軽にインターネットを楽しめる Tab などもあり高齢者の中にもネット環境が整備されつつある。マイボイスコムが2009年8月21日、インターネットと家族のコミュニケーションに関する調査結果(今回はインターネット調査)の中にも、ネット環境が家族間のコミュニケーションにプラスの効果が見られると答えた人が多い。

近くにいても、遠くにいても、気軽に連絡をメールなどを介してとることができる。しかしながら、対面での会話の機械が減ってきているという危惧もあるのも現実である。つまり、この結果では、家族の会話に及ぼす影響は少ないが、いずれテレビのように普及率や即時性がネット環境に組み込まされた際には、この結果が覆されるかもしれない。そうならないためにも対話とネット環境のバランスを考えていかなければならないと思う。

文献

Garbagenews.com: <http://www.garbagenews.net/archives/989574.html>

平成 19 年版国民生活白書:

http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/html/07sh010201.html

情報通信白書:

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/html/me411100.html>

平成 13 年版国民生活白書

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/wp-pl/wp-pl01/html/13404c20.html>、

第13章 夫婦関係を保つもの

吉岡志帆

1 はじめに（問題構成）

前提：

人々が幸福な人生を歩むためには、豊かな暮らしを送れるかどうかが重要と言える。

持続可能な社会では、社会のより多くの人々が現在より質の高い豊かさを実現すること（＝最大多数の最大幸福）を目標としている。日本は戦後 60 年で目覚ましい経済成長を遂げ便利な生活を送れるようになったが、一方で多くの心の豊かさを代償にしてきたように思う。例えば、家庭内状況では離婚率の上昇、児童虐待件数の増加、家族で食卓を囲む時間の減少などが挙げられる。一人でも多くの人々が心身ともに豊かに生活を送る社会が理想的である。

本レポートでは、豊かな暮らし（生活満足度）を表す指標として「夫婦関係良好度」に着目したい。夫婦関係が良好な家庭の方が精神的に安定しており、豊かな暮らしを送っているということを前提とする。そして夫婦関係を良好に保つためには何が必要なのか、今回の調査を通して分析、考察したい。

2 仮説

仮説①：収入の多い家庭の方が、夫婦関係は良好である。

①の対立仮説：収入の多い家庭の方が、夫婦関係は良好でない。

仮説②：収入の多い家庭の方が、健康状態が良好である。

仮説③：健康状態の良い夫婦の方が、夫婦関係は良好である。

以上の仮説を立てた理由を説明する。

仮説①については、収入の多い家庭の方が経済的に安定しているので精神的余裕もでき、配偶者との関係も良好に保てると思ったからである。

仮説③については、収入が多ければ、医療、福祉、娯楽などに使える資金が多くなる。そのため、心身共に健康な状態を維持しやすくなり、質の高い豊かな生活を送ることが可能となる。その結果が夫婦関係にも影響を及ぼすのではないかと考えたからである。

3 データ・変数の説明

3.1 データについて

調査の正式名称は「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」である。調査対象（母集団）は高槻市に移住する 20 歳以上の男女で、対象者の数（計画サンプル数）は 200

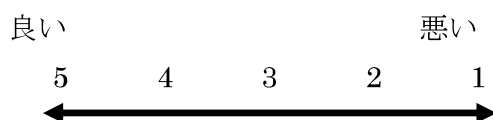
0人である。有効回収数は1225人、有効回収率は61.3%（暫定）である。

3.2 変数について

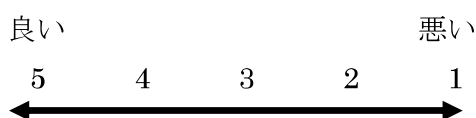
- ・用いた質問項目と、その操作化（反転や足し合わせ）についての説明

用いた質問項目は以下の4つである。

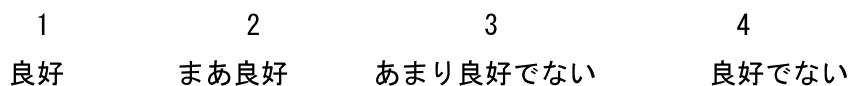
- ・ Q51 あなたの現在の健康状態はいかがですか。



- ・ Q62 あなたの配偶者の現在の健康状態はいかがですか。



- ・ Q63 あなたの夫婦関係は良好ですか。



- ・ Q74 過去一年間の世帯収入

	世帯全体
1. 100万円未満	1
2. 100万円～200万円未満	2
3. 200万円～400万円未満	3
4. 400万円～600万円未満	4
5. 600万円～800万円未満	5
6. 800万円～1000万円未満	6
7. 1000万円～1500万円未満	7
8. 1,500万円以上	8
9. わからない	9

Q63 に関しては数値を反転し、良好であるほど数値が高くなるように操作した。

Q74 に関しては世帯収入を4分類に分割して分析した。

・用いる変数の度数分布表

表1 夫婦関係良好度

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	2.00	22	1.8	2.6	2.6
	3.00	65	5.3	7.8	10.4
	4.00	422	34.4	50.4	60.8
	5.00	328	26.8	39.2	100.0
	合計	837	68.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	388	31.7		
合計		1225	100.0		

表2 世帯収入4分類

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	400万円未満	413	33.7	37.5	37.5
	400万円～600万円未満	244	19.9	22.2	59.7
	600万円～800万円未満	199	16.2	18.1	77.8
	800万円以上	244	19.9	22.2	100.0
	合計	1100	89.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	125	10.2		
合計		1225	100.0		

表3 自分の健康状態

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	悪い	46	3.8	4.0	4.0
	2.00	138	11.3	11.9	15.8
	3.00	404	33.0	34.7	50.5
	4.00	320	26.1	27.5	78.0
	良い	256	20.9	22.0	100.0
	合計	1164	95.0	100.0	
欠損値	99.00	61	5.0		
合計		1225	100.0		

表4 配偶者の健康状態

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	悪い	32	2.6	3.9	3.9
	2.00	97	7.9	11.7	15.5
	3.00	293	23.9	35.3	50.8
	4.00	237	19.3	28.5	79.3
	良い	172	14.0	20.7	100.0
	合計	831	67.8	100.0	
欠損値	8.00	364	29.7		
	99.00	30	2.4		
	合計	394	32.2		
合計		1225	100.0		

4 分析

4.1 仮説①（収入の多い家庭の方が、夫婦関係が良好である）について分析

分析手法：一元配置分散分析

分析結果：

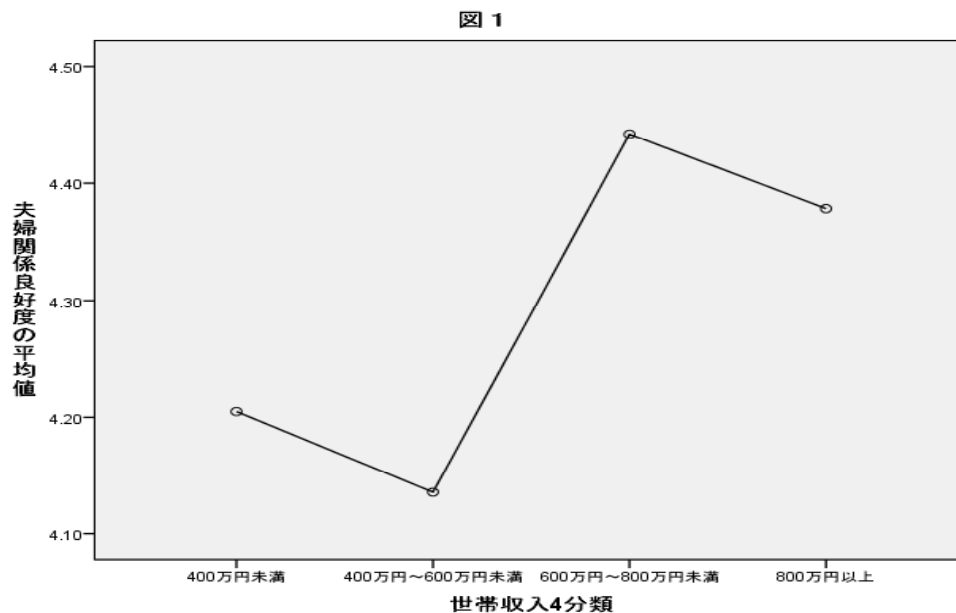


表1a 多重比較

夫婦関係良好度
Tukey HSD

(I) 世帯収入4分類	(J) 世帯収入4分類	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95%信頼区間	
					下限	上限
400万円未満	400万円～600万円未満	.06935	.06679	.727	-.1026	.2413
	600万円～800万円未満	-.23708*	.07236	.006	-.4234	-.0508
	800万円以上	-.17343*	.06590	.043	-.3431	-.0038
400万円～600万円未満	400万円未満	-.06935	.06679	.727	-.2413	.1026
	600万円～800万円未満	-.30644*	.07915	.001	-.5102	-.1027
	800万円以上	-.24279*	.07328	.005	-.4315	-.0541
600万円～800万円未満	400万円未満	.23708*	.07236	.006	.0508	.4234
	400万円～600万円未満	.30644*	.07915	.001	.1027	.5102
	800万円以上	.06365	.07839	.849	-.1382	.2655
800万円以上	400万円未満	.17343*	.06590	.043	.0038	.3431
	400万円～600万円未満	.24279*	.07328	.005	.0541	.4315
	600万円～800万円未満	-.06365	.07839	.849	-.2655	.1382

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

<検定結果>

一元配置分析の結果は5%水準で有意であった。図1は平均値のプロットである。綺麗な右肩上がりではないが、収入が高くなるにつれて夫婦関係良好度も高くなっていることが分かる。

以上の結果から、自分が掲示した仮説①は支持される。対立仮説は棄却される。

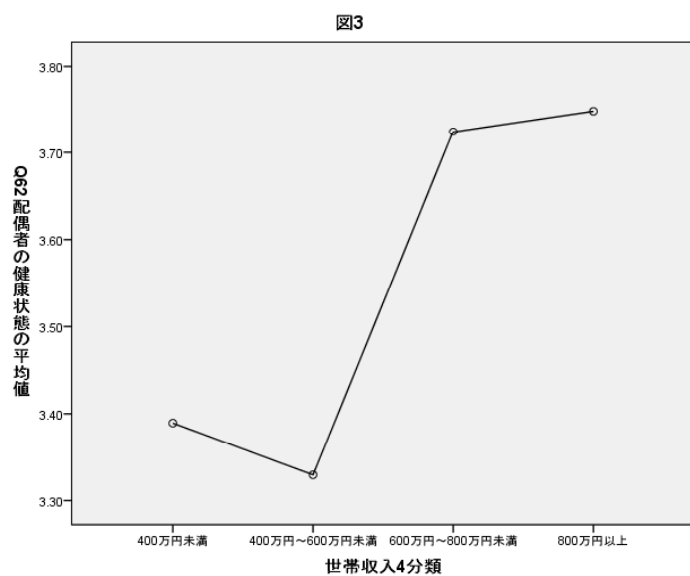
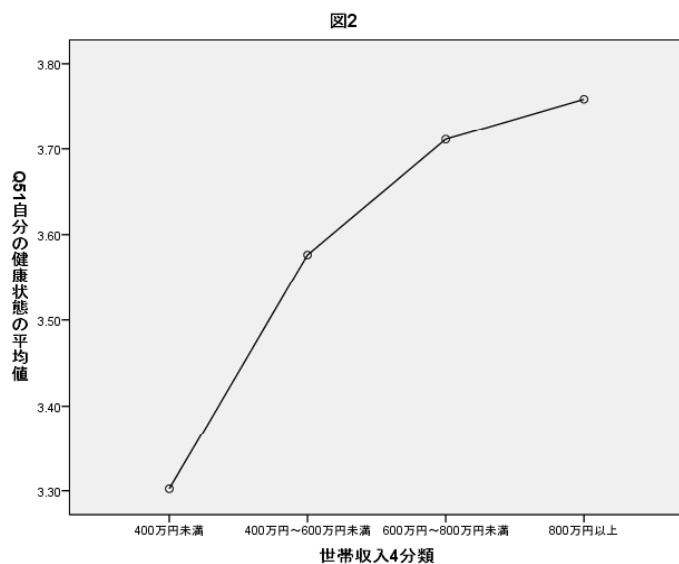
この結果を受けて、なぜ収入の多い家庭の方が夫婦関係が良好であるのかを考える。そこで、仮説③で示した「配偶者と自分の健康状態」が関係しているのではないかと考える。収入が多ければ医療、福祉、娯楽などに使える資金が多くなるため、心身共に健康な状態を維持しやすくなり、結果質の高い豊かな生活を送ることが可能となり、夫婦関係にも影響を及ぼすのではないかという考えである。

これを踏まえ、仮説②、③について分析する。

4.2 仮説②（収入の多い家庭の方が、健康状態が良好である）について分析

分析手法：一元配置分散分析

分析結果



<検定結果>

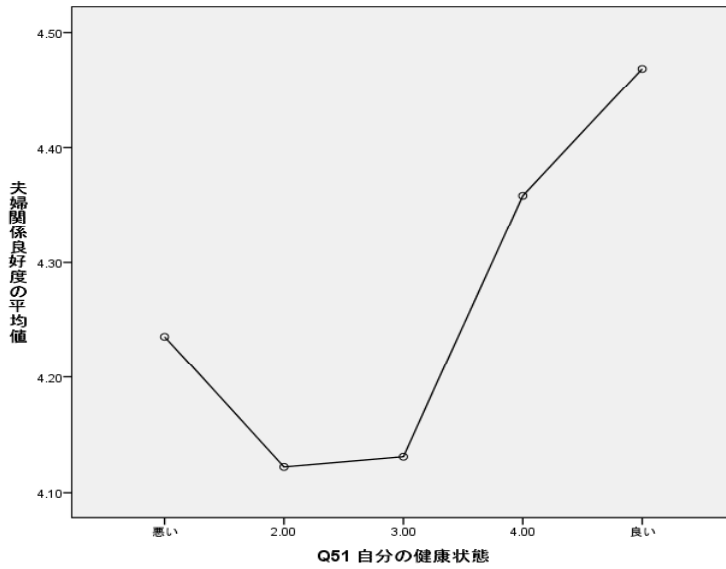
平均値のプロットしか掲載していないが、一元配置分析の結果は5%水準で有意であった。よって仮説②は支持される。

4.3 仮説③（健康状態の良い家庭の方が、夫婦関係は良好である）について分析

分析手法：一元配置分散分析

分析結果

図 4

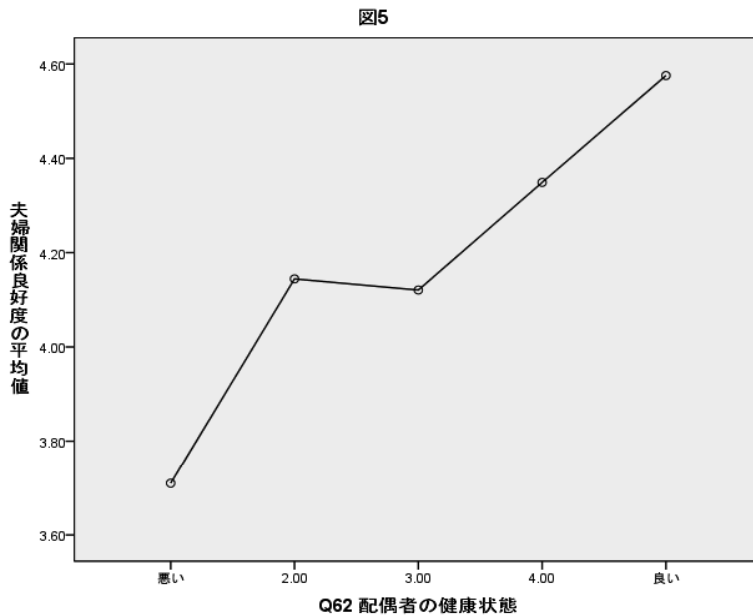


多重比較

夫婦関係良好度
Tukey HSD

(I) Q62 配偶者の健康状態	(J) Q62 配偶者の健康状態	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
悪い	2.00	-.43465*	.14018	.017	-.8179	-.0514
	3.00	-.41101*	.12839	.012	-.7620	-.0600
	4.00	-.63926*	.12983	.000	-.9942	-.2843
	良い	-.86590*	.13257	.000	-1.2283	-.5035
2.00	悪い	.43465*	.14018	.017	.0514	.8179
	3.00	.02364	.07969	.998	-.1942	.2415
	4.00	-.20461	.08200	.093	-.4288	.0196
	良い	-.43125*	.08627	.000	-.6671	-.1954
3.00	悪い	.41101*	.12839	.012	.0600	.7620
	2.00	-.02364	.07969	.998	-.2415	.1942
	4.00	-.22825*	.05963	.001	-.3913	-.0652
	良い	-.45489*	.06539	.000	-.6337	-.2761
4.00	悪い	.63926*	.12983	.000	.2843	.9942
	2.00	.20461	.08200	.093	-.0196	.4288
	3.00	.22825*	.05963	.001	.0652	.3913
	良い	-.22665*	.06818	.008	-.4130	-.0403
良い	悪い	.86590*	.13257	.000	.5035	1.2283
	2.00	.43125*	.08627	.000	.1954	.6671
	3.00	.45489*	.06539	.000	.2761	.6337
	4.00	.22665*	.06818	.008	.0403	.4130

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。



<検定結果>

一元配置分析の結果は5%水準で有意であった。

自分・配偶者共に健康状態の良い夫婦の方が、夫婦関係が良好であることが分かる。

以上の結果から、仮説③は支持される。

5 結果のまとめと議論

一説の内容をうけて、「収入の多い家庭の方が夫婦関係は良好である」は、「健康状態」から解釈できる。

そして本レポートは、世帯収入が夫婦関係や健康状態に影響していることを示している点でも重要である。このことは所得格差が、①夫婦関係という「心の豊かさ」の格差につながってしまっていること、②健康格差にもつながってしまっていること、という意味を持つものである。

ゆえに所得格差を少しでも解消することが国民の生活満足度向上のために重要と考える。所得格差の原因は、①非正規雇用の増加②失業率の増加などが挙げられる。この所得格差という問題をいかに緩和できるか、国の今後の政策に期待したい。

参考文献・URL

- ・ 全国家族調査 (NFRJ) <http://www.wdc.jp.com/jsfs/committee/contents/>
- ・ 平成17年度国民生活白書 (第2章 子育て世代の所得をめぐる環境 第2節 子育て世代内の所得格差)

http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/01_honpen/html/hm02020002.html

- 所得格差をどう見るか <http://www.nira.or.jp/pdf/review3.pdf#search='所得格差原因'>